

生活の中の
仏教語

中陰 (ちゅういん)



ほっと通信編集委員 吉田俊英

《1、中陰の意義と中陰供養》 中陰は、四十九日と同じ意味で用いられる場合が多いようです。仏教学的には「人が死んでから次の生を受けるまでの中間期における存在。」のことを意味する言葉です。中有(ちゅうう)とも呼ばれています。仏教では「命あるものが何度も転生し、人だけでなく動物なども含めた生類として生まれ変わる」という輪廻思想に関連して、人が生まれてから転生するまでの期間を四つに分類した四有説(しうせつ)が説かれています。＜①生有(しょうう)：母親の胎内で受胎して命がめばえる、②本有(ほんぬ)：命が芽生えてから死ぬまでの一生、③死有(しう)：死の瞬間、④中有(ちゅうう)：死有と生有の中間の存在＞

中陰の期間は一般には49日間と考えられており、四十九日(しじゅうくにち)までにはすべての生物が生有に至るとされています。

チベット仏教の死者供養を説いた『チベット 死者の書』という経典があります。この経典は、死に逝く病人に対して僧侶が読経するだけでなく、「死後も死者の魂が迷いの世界に再び輪廻しないよう、49日間にわたってお経を唱えることで死者が輪廻から解脱する道を指し示す」という内容になっています。

日本でも「中陰供養は故人を仏界へ送る大切な供養である」と位置付けられてきました。七本塔婆と言って七日目ごとに遺族は故人の供養を行い、お墓に塔婆を立てます。そういう段階を踏んで四十九日目には満中陰(まんちゅういん)の法事を行い、故人を来世に見送ってきました。故人・遺族の住居と墓所と菩提寺が近接しているのが当たり前だった時代には、七本塔婆に象徴されるような形で丁寧に中陰供養が勤められてきました。

《中陰供養の意義を継承しましょう》 経済成長と社会構造の変化の中で、地方から大都市圏への人口流入が続きました。地方出身者が大都市圏で生活し葬儀を行った場合、納骨を四十九日や百箇日に行わざるを得ないことも多い。葬儀直後に納骨しても毎週の墓参が

困難な場合も多い。そのため、葬儀直後に「繰上げ法要を行うのが当たり前」という考えがまかり通り、七本塔婆が事実上廃れてしまったケースも多いようです。

遠方からの親戚や会葬者が後日の中陰供養に参列するのが難しいことを考慮して便宜を図り、従来から葬儀直後に中陰法要を予修法要として勤めてきました。その場合、後日菩提寺で遺族が本当の四十九日法要百ヶ日法要を行なうのが通例でした。「繰上げ法要を行ったから、すべて終わった。」という思い違いをしている遺族も多い昨今です。中陰供養の意義がきちんと継承されないのは、大いに問題です。我々寺院側も説明不足を反省する必要があります。墓参できなくても、塔婆を立てられなくても、故人の為に遺族が出来る事があります。自宅に中陰棚を置くのは其のためです。位牌を祀り、香・華・灯明・飲食を供え、読経することは出来るはずです。遺族は予修法要を勤めたとしても、本法要もきちんと行いましょう。

(1209字) (仙台市若林区 洞林寺住職 曹洞宗布教師)